

Hartmann von Aue の „Iwein“ における 不定関係代名詞について

長 縄 寛

0. はじめに

ドイツ語における関係代名詞には、指示代名詞の機能から転用された定関係代名詞 *der* と、疑問代名詞や不定代名詞の機能から転用された不定関係代名詞 *wer* の二つの系統がある。I. ダール (Ingerid Dal) によれば、「指示代名詞から成立した関係詞によって導入された関係文は、その統語上の価値からすると、名詞に付加される文肢である。」¹これに対して、「疑問代名詞や不定代名詞から発達した関係代名詞は元来、指示代名詞から生まれた関係代名詞とは、統語上厳密に区別され、それらは上位文の文肢とは関係せず、それらによって導入された文は名詞に付加する文肢ではなく、上位文の独立した名詞的文肢として機能する。」²としている。

また、不定関係代名詞の起源についてヘルマン・パウル (Hermann Paul) は次のように述べている。一般化する関係代名詞は、副詞 *sô* が疑問詞の前に置かれ、そのあとに二つ目の *sô* が続くことによって発生した。この疑問詞はその際、恐らく本来は不定代名詞の機能を持ったものであるとみることができる。従って Ahd. の *sô* (h)*wer* *sô* は „*sô* einer wie“ の意であり、*sô* (h)*wer* は本来、上位文に属していた。古高ドイツ語では既に二つ目の *sô* が消滅することがある。中高ドイツ語では *sô* (h)*wer* が *swer* に縮合した³。つまり、不定関係代名詞は、本来 *sô* (h)*wer* ままでが主文中の名詞的文肢であり、これに副文の導入語として機能する

1 Ingerid Dal: Kurze deutsche Syntax. Tübingen, 1966, S. 198.

2 Dal 1966, S. 201.

3 Vgl. Hermann Paul: Deutsche Grammatik. Bd. 4. Unveränderter Nachdruck der 1. Auflage von 1920. Tübingen, 1962, S. 199.

二つ目の *sô* が結びついたものである。しかし、これらは頻繁に用いられることでその結びつきを強め、*sô* (*h*)*wer* が副文の先頭へと移行することによって、いわば三語で一つの関係代名詞の機能を果たすと捉えられるようになったのである⁴。中高ドイツ語ではさらに、*swer* へと一語に融合し、14世紀には、語頭の *s* も消滅し、現在のように疑問代名詞と同じ語形になった。

このように不定関係代名詞は、元来上位文の独立した名詞的文肢として機能していたが、しかしそれとともに、主文中に関係文を示す人称代名詞や指示代名詞が置かれることもあった。先ず、これら三つのタイプを *swer* の例で見よう（一重の下線部は関係文、二重の下線部はそれを受ける代名詞を示す。以下同様）。

- (1) ,irn habet niender selhen helt
 ern lâze iuch nemen swen ir welt
 ê er iu den brunnen bewar.‘ (Iw. 2163ff.)
 「あなたをあなたが望む人と結婚させないで、
 あなたのために泉を守ろうとするほどの勇士を
 あなたは決して抱えていません。」
- (2) wand ers ofte engiltet
 swer borg niene giltit. (Iw. 7155f.)
 なぜなら、借りたものを返さない者は
 しばしばその償いをしなければならないからです。
- (3) ,swer sich an troume kêret,
 der ist wol gunêret.‘ (Iw. 3547f.)
 夢を当てにする者は
 きっと名誉を失うことになる。

例 (1) では *swer* の 4 格、*swen* で導かれる関係文が後置され、関係文で表わされる人を受ける何らかの代名詞なしに、関係文全体が不定詞

4 Vgl. Oskar Erdmann: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. 1. Teil. Halle, 1874, S. 56.

nemen の 4 格目的語になっている。これに対し例 (2) では、後置された関係文で表わされる人が、主文中で人称代名詞 er によって先取りされている。例 (3) では前置された swer の関係文で表わされる人を、指示代名詞 der によって主文で受け直している。

古高ドイツ語の *sô wer sô* は、本来上位文の名詞的成分として機能していたが、中高ドイツ語の *swer* に至ると、この用法と並んで、上位文に対して副詞的な成分として機能する用法も見られるようになる。男性の *swer* の場合、条件文や認容文を導入し、*„wenn einer“* の意味で用いられ、中性の *swaz* の場合、その多くは副詞的な用法として *„so sehr als“* *„soviel“* の意味で用いられる。

(4) *Swer gerne gilet, daz ist guot.* (Iw. 7147)

進んで借りを返すならば、それは良いことだ

(5) *swaz ich noch hân gestriten,*

so gewan ich nie sô grôze nôt. (Iw. 7450f.)

どれほど私がこれまで戦ってきたにせよ、

これほどの大きな苦しみを味わったことは一度もなかった。

本稿では、中高ドイツ語で書かれたハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue) の『イーヴェイン』 („Iwein“) ⁵ に見られる不定関係代名詞構文に焦点を当て、当時のドイツ語で不定関係代名詞がどのように用いられていたのかということについて述べてみたい。その際、上で見たように、本来の用法であると考えられる名詞節の機能を果たすものについては次の第一章で、例 (4) (5) のような副詞節の機能を果たすも

5 この作品の主要原典は、クレチアン・ド・トロワの『イーヴェイン』(1170-75 頃成立) であるが、ドイツ中世宮廷騎士文学の代表的詩人であるハルトマン・フォン・アウエは、これにかなり自由な改変を加えて、独自の価値を持つ芸術作品を作り上げた。ハルトマンの書いた『イーヴェイン』の原本文は伝来しておらず、13 世紀初頭から 16 世紀初期までに書写された 15 写本と 17 断片が今日まで伝えられている。今回定本としたのは、1968 年にルートヴィヒ・ヴォルフによって改訂された第 7 版である。

のについては、第二章で触れることにする。まず、第一章では不定関係代名詞の用法が、現在の用法とどのように異なっているかといった事を明らかにしたい。今日のドイツ語では一般に、不定関係代名詞 *wer* が前置される場合、あとに続く主文中に、前の関係文を受ける指示代名詞 *der* が置かれることがあるが、この *der* の格と不定関係代名詞 *wer* の格が同じであれば、*der* を省略でき、違う場合には省略されない。反対に関係文が後置される場合には、通常先行する主文中に指示代名詞 *der* は置かれない。また中性の *was* については 1 格と 4 格が同じ語形であるので、この 1 格と 4 格の組み合わせの場合も省略が可能である。しかし、上の例文 (2) のように、関係文を受ける代名詞として指示代名詞だけでなく、人称代名詞 *er* も用いられ、しかも、ここでは関係文が後置されているにもかかわらず、代名詞が置かれている。このような理由から、第一章では、分類の方法として、まず、関係文の前置の場合と、後置の場合に分類し、さらに下位分類として *swer* と *swaz* を区別する。そしてこれら 4 つのカテゴリーについて、主文中に代名詞が置かれないケース、主文中に人称代名詞が置かれるケース、そして指示代名詞が置かれるケースの 3 つに分類する。また、不定関係代名詞の格とそれを受ける代名詞の格がどのような組み合わせになっているかということについても触れ、Mhd. の不定関係代名詞の用法が今日の用法とどのように異なっているかを明らかにしたい。

1. 名詞的機能の関係文

1.1 関係文の前置

名詞節の機能の関係文は『イーヴァイン』に 80 例見られ、そのうち関係文が前置されるケースは 49 例である。まず *swer* について見てみることにしよう。この位置に現われる *swer* は 49 例中 33 例ある。

1.1.1 *swer*

関係文が前置される場合、それを受け直す代名詞が主文中に置かれない例は『イーヴァイン』には見られず、必ず関係文を示す何らかのもの（人称代名詞、指示代名詞あるいは副詞 *mite*、*an* などと結びついた代名詞に代わる *dá*）が主文中に置かれる。では最初に、人称代名詞によって

受け直される例を挙げてみよう。

- (6) wan zewâre ez ist guot,
 swer gerne vrûmeclichen tuot,
 daz mans im genâde sage,
 daz er dar an iht verzage (2731ff.)
 進んで人の役に立とうとする者が
 それをやめないように、
 その人に感謝を述べることは
 本当に良いことだからである。

例 (6) では関係文を受け直す代名詞として、Nhd.では通常、指示代名詞 *der* の 3 格 *dem* が用いられるところであるが、ここでは人称代名詞 *er* の 3 格 *im* が置かれている。1 行目の *ez* は 3 行目冒頭の *daz* から始まる従属文を指しており、2 行目の関係文はこの *daz* 文に属するものである。本来なら、*daz* 文の後ろにくるべきものであるが、*daz* 文の前に置かれて、*tuot* が前行の *guot* と押韻している。人称代名詞によって関係文を受け直す例は『イーヴァイン』に、関係文前置の場合 7 例見られる。そして *wer* と *er* の格の組み合わせは、1 格－1 格のものが 5 例⁶と多く、1 格－3 格が例 (6) の 1 例のみ、ほかに 1 格－2 格、1 格－4 格も 1 例ずつ⁷見られる。興味深いのは、これら 8 例のうち 6 例までもが、例 (6) のように *daz*-文の前に関係文が押し出され、そのうち 4 例は次の例のように、押韻その他の理由で行の入れ替えの必要のないことである。

- (7) daz muosen sî besorgen,
 swer borget und niht gulte,
 daz er des lihte engulte. (7150ff.)
 物を借りて返さない者は
 その償いをするということ

6 例 (7) 以外に、921. 3033. 5743. 6065.

7 1357. 4604.

彼らは心配しなくてはならなかった。

次に関係文を受け直す代名詞が指示代名詞の例を挙げてみよう。

- (8) wan swer von wäfen wirt wunt,
der wirt schiere gesunt,
ist er sinem arzte bi: (1551ff.)
というのも、武器によって傷つけられた者は
医者のおそばにいれば、
すぐに回復するからである。

- (9) ,swem mins dienstes nôt geschiht
und swer guoter des gert,
dern wirt es niemer entwert.‘ (6003ff.)
私の奉仕が必要な人で、
それを求める善良な人は
決して私の奉仕を拒まれることはありません。

例(8)では1格のswerをderで受け直しており、例(9)は3格のswemと、さらにswerの文で表わされた人をderで受け直した珍しい例である。人称代名詞でなく、指示代名詞で受け直すケースは『イーヴァイン』に前置の場合、25例と非常に多く見られ、格の組み合わせは、例(8)のような、ともに1格であるのが10例⁸と一番多い。この組み合わせは、人称代名詞の場合でも8例中5例と一番多かった。このようにswerが前置された場合、主文中にはすべて代名詞が置かれ、今日のドイツ語に見られるような代名詞省略の例は皆無である。また1格－1格以外の格の組み合わせの例は、1格－4格、1格－3格がそれぞれ5例⁹、その他5例¹⁰である。

8 例(3)、(8)以外に、484. 511. 2852. 4627. 6003. 6312. 6574. 7676.

9 1格－4格: 1142. 1204. 2039. 4389. 5245. 1格－3格: 1. 2153. 2736. 3077. 4998.

10 例(10)の4格－1格(pl.)以外に、1格－2格: 1885. 1393. 3格－1格: 6002. 3格－2格: 2270.

さて、次の例は本来単数の swer に複数の指示代名詞が対応するという非常に稀なケースである。

- (10) an swen got hât geleit
triuwe und andern guoten sin,
volle tugent, als an in,
und den eins guoten wîbes wert,
diu niuwan sînes willen gert,
suln diu mit liebe lange leben,
den hât er vreuden vil gegeben. (2426ff.)
誠実とその他の良い心、
完全な徳を彼のように
神から授かり、
そしてまた、夫の望むことだけを求める
良い妻が授かった者は、
夫婦が愛し合って長く生きれば、
神は彼らに多くの喜びを与え給うのだ。

この例では、一行目の関係代名詞 swen および四行目の den で表わされる人と、同じく四行目の eines guoten wîbes との両者を、六行目の中性複数の指示代名詞 diu で受けている。従って正確には、単数の swen を直接複数の diu で受けているとは言い難いが、辞書¹¹によると、この個所は関係代名詞に相応する代名詞が主文中に置かれ、それが指示代名詞である項に分類され、複数の指示代名詞の例として、suln のあとの diu に die beiden とかっこ入りで説明されている。辞書にはさらに、単数の swer を複数の die で受け直した、明らかに数の不一致と見られる次の例が挙げられている。

11 Vgl. Benecke, G. F./Müller, W./Zarncke, F.: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* III. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854–61. Hildesheim, 1963, S. 569a.

- (11) swer in sach, man oder wîp,
die heten wert sinen lîp. (Parz. 307, 11f.)
 彼を見たものは誰でも、男であれ女であれ、
 彼をすばらしい人だと思った。

ここでは swer で表わされた人が、「男であれ女であれ」という譲歩文で受けられた結果、複数概念として捉えられ、改めて複数の指示代名詞で受け直されたのである。このような例はすでに古高ドイツ語のオトフリト (Otfrid von Weissenburg) の『総合福音書』 („Evangeliën buch“) で見られる、単数の不定関係代名詞 *sô wer sô, sô waz sô* が、複数の指示代名詞 *thie* および人称代名詞 *sie* で受ける次に示すような例に対応するものである。

- (12) minnôt io thie grazzo sô wer sôsô iuih hazzô (II. 19, 16)
 あなた方を憎む人たちを、いつも誠実に愛しなさい。
- (13) sô waz sô in erdu habê lîb, thaz sî gomman inti wîb;
 Oba sie thes gigâhent, zi giloubu sih gifâhent:
gidoufit werdên alle; sô ist iro laba thanne. (V. 16, 30ff.)
 この世で生きている者は皆、男であれ女であれ、
 努めて神を信じようとするのであれば、
 皆洗礼を受けるように。そうすれば、彼らに救いが与えられる。

1.1.2 swaz

swaz によって導入される関係文が前置されるのは16例あり、swer と同様、主文中に代名詞が置かれないケースは見られない。次の例 (14) は人称代名詞で、例 (15) は指示代名詞で関係文を受け直す例である。

- (14) und swaz er warmes an geleit,
daz giht er ez sîn wirtes cleit. (2817f.)
 彼が身に付ける暖かいものは何であれ、
 それが主人の衣服だと彼は言う。

- (15) ,swes iu nû sî ze muote
des bewiset mich bî gote.‘ (6060f.)
 「あなたが決意していることを
 お願いですから私に教えてください。」

(14) の swaz は an geleit (an geleet の縮約形) の 4 格目的語で、それを受ける ez は 1 格である。(15) の swes は jm et² ze muote sîn で、「ある人がある事を考えている」という構文を取るため、2 格になっている。二行目最初の des も bewiset が要求する 2 格である。(14) のような人称代名詞で受け直す例は 2 例のみであるのに対して、(15) のような指示代名詞の例は 12 例あり、swer と同様に数多く見られる。格の組み合わせは、人称代名詞が置かれる場合、(14) の他に、4 格－1 格がもう 1 例¹² 見られる。指示代名詞が置かれる場合には、1、4 格の組み合わせが 5 例¹³、4 格－2 格が 4 例¹⁴、2 格－2 格が例 (15) を含め 2 例¹⁵、残りの 1 例は 4 格－2 格から 2 格－2 格へと牽引された次のような例である。

- (16) ,swes iu diu niht gesagen kan,
des bewiset iuch hie nieman.‘ (5889f.)
 「その人があなたに言うことができないことは
 ここでは誰もあなたに教えられません。」

本来 gesagen は 4 格の目的語を要求する動詞であるが、ここでは主文中の des という 2 格形に引かれて関係文中の swaz も swes という 2 格形になっており、この現象を牽引同化作用 (Attraktion) と言う。

ところで、『イーヴァイン』には指示代名詞や人称代名詞の他にも、関係文を受け直すものとして指示的副詞 dâ が主文中に置かれることもある。

12 2155.

13 4 格－4 格: 342. 3622. 1 格－1 格: 663. 1 格－4 格: 6384. 4 格－1 格: 243.

14 4 格－2 格: 4544. 5180. 5922. 7479.

15 2 格－2 格: 他に 5282.

- (17) ,swaz ich doch lasters dâ gewan,
dâ was ich ein teil unschuldec an.‘ (757f.)
 「そこで私が受けた恥辱に
 私は少しも責任がない。」

ここでは *dâ* は二行目文末の *an* とともに、Nhd. の „*daran*“ の意で用いられている。ちなみに、こういった副詞 *dâ* によって受け直される例は、(17) 以外にもう 1 例見られ¹⁶、そこでは *mite* と結びつき、„*damit*“ の意で用いられている。

1.2 関係文の後置

関係文の後置は『イーヴァイン』に 31 例見られ、*swer* が後置される例は 4 例と少ないのに対して、*swaz* が後置される例は 27 例と多い。関係文前置の場合と同様、まず始めに *swer* について例文を挙げながら見てみることにしよう。

1.2.1 *swer*

主文中に代名詞が置かれない例は 3 度見られ、主文と関係文の要求する格の組み合わせは次の例 (18) を含めて 3 格—3 格が 2 例¹⁷、4 格—4 格が例 (1) の 1 例である。これに対して、人称代名詞が置かれるのは 1 格—1 格の 1 例のみである。また指示代名詞が置かれる例は皆無である。次に代名詞が置かれない例と人称代名詞で先取りする唯一の例を示すと、

- (18) *ir gewinnet tage und daz guot,*
het ich gedienet den muot,
daz mir gnâde wurde schîn
und sweme ir gnædec woldet sîn. (7989ff.)
 あなたはきっと長命と財産を得られますから、
 もし私がそのお気持ちに価することをしたのなら、

¹⁶ 4551.

¹⁷ 他に、1568.

私にも、またあなたが好意を示したいと思われる
誰に対しても、そうおできになるでしょう。

(19) wand ers ofte engiltet

swer borg niene giltet. (7155f.)

借りたものを返さない者は

しばしばその償いをしなければならないからである。

例 (18) では、sweme は形容詞 gnædec の 3 格補足語であり、関係文によって表わされる人が主文中の代名詞によって示されることなく、関係文全体が三行目の mir と並列されている。例 (19) では、統語上この 2 行を入れ替えることはできず、er が swer の文を先取りしている。後置された関係文を人称代名詞 er が先取りするのはこの 1 例のみであり、先に見たように、人称代名詞で受けるのは、もっぱら swer の文が前置される場合のようである。

1.2.2 swaz

swaz によって導入された関係文が後置されるのは 27 例と非常に多く見られ、そのうち 21 例が主文中に代名詞の置かれなないケースであり、前置の場合とまったく逆の現象が認められ、今日のドイツ語と同じ傾向を示している。この 21 例中主文と関係文の要求する格が同じ 4 格のケースが 9 例¹⁸、4 格－1 格の場合が 3 例、1 格－4 格の場合が 2 例あり¹⁹、これらの場合にはもちろん、両者の語形が一致しているため、主文中に代名詞を置かなくとも格の相違が問題となることはない。しかしこの他の組み合わせで代名詞が置かれなない場合には、主文中で欠けている格を補って考える必要がある。1 格と 4 格以外に、主文と関係文で要求される格が異なる例は、4 格と 2 格の組み合わせで swaz が関係文で要求される 2 格形で現われるのが 6 例²⁰見られる。その一例を示してみよう。

18 4 格－4 格: 846. 1463. 1791. 3094. 5570. 5813. 6167. 7380. 8053.

19 4 格－1 格: 835. 4118. 7467. 1 格－4 格: 857. 8009.

20 例 (20) 以外に、4 格－2 格: 519. 622. 3525. 4582. 6069.

- (20) er hât von iu ein schœne wîp
 ein rîchez lant und den lîp
 und swes ein man zer werlte gert. (2747ff.)
 彼はあなたのお陰で美しい妻と、
 豊かな国と生命と、
 世間の人が求めるものをすべて手に入れた。

例(20)ではswesが関係文中の動詞gernの要求する2格形で現われ、関係文全体が主文中の動詞hânの4格目的語であるが、それを受ける4格の指示代名詞が置かれていない。これとは逆に、次の例は、関係文では2格形が要求され、主文では4格が要求される時に、4格形をとったものである。

- (21) sô mac sî mit minnen
 vil wol von mir gewinnen
swaz sî des mînen ruochet,
 swâ siz ze rehte suochet: (5731ff.)
 そうすれば、彼女が正当に求める時にはいつも、
 彼女が望む私のものすべてを
 彼女は私から十分に
 快く得ることができる。

ここでは、関係文中の動詞ruochenが2格を要求するにもかかわらず、主文中の動詞gewinnenが要求する4格で現われている。これも例(16)に見られた牽引同化作用の一種である。

次に、人称代名詞ezによってswazの関係文が先取りされるケースは5例と少なく、格の組み合わせは1格と4格のものが3例²¹、その他が2例²²見られる。それぞれ1例ずつ示すと、

21 例(22)以外に、4格—1格: 807. 1格—4格: 6461.

22 例(23)以外に、2格—4格: 4968.

- (22) ez ist an sinem lîbe gar
swaz ein rîter haben sol. (5912f.)
騎士が持つべきものはすべて
すっかり彼の身に備わっている。
- (23) man saget von sîner miltekheit,
ezn wurde rîter nie verseit
swes er in ie gebæte. (4561ff.)
彼の気前のよさについて人が言うには、
かつて騎士が彼に頼んだことは
一度も断られたことがなかったそうです。

例 (22) では 4 格の swaz に 1 格の ez が、例 (23) では関係文中の動詞 gebiten が要求する 2 格の swes に 1 格の ez がそれぞれ対応している。

最後に、指示代名詞 daz が後続の関係文を先取りする例を見てみよう。このケースは、次の 1 例のみであり、格に関して言えば、例 (16) や (21) のように、関係代名詞の格が主文中で要求される格に合わせられた、つまり主文中の指示代名詞に牽引されたケースである。

- (24) und sult im des genâde sagen
swes ich iu hie gedienet hân: (5120f.)
ここで私があなたに奉仕したことに対して
彼に感謝を述べて下さい。

ここでは、前半の主文中にある指示代名詞の 2 格 des が後半の関係文を先取りし、jm. et. genâde sagen で、「事²に対し人³に感謝を述べる」という構文になっている。これに対し、後半の関係文中では dienen が 3 格と 4 格をとるにもかかわらず、des に牽引され、関係代名詞が swes という 2 格形になっている。今日の文法の説明では、不定関係代名詞の was によって導入された関係文が後置される場合、主文中に指示代名詞は置かれなるとされる一方で、主文中に指示代名詞が置かれる場合、これを先行詞と見なし、was は先行詞を限定的に修飾する定関係代名詞 das と同じ用法であるとされる。上で挙げた例を見ても、定関係代名詞の用法

と不定関係代名詞の用法に接点のあることが窺える。著者が前稿で扱ったオトフリトの『総合福音書』にもこういった接点を示す例がいくつか見られ²³、次に挙げる例は、関係文を示すものとして、代名詞でなく、既に普通一般の名詞が主文中に置かれた例である。

- (25) allaz guat zi wâre sô flôz fon imo thäre
Allên liutin io ginuag, sô wer sô es thanne thâr giwuag;
 ther thara in thiû giliafi, thaz thara zi imo riafi.
 (III. 14, 82f.)

まことにあらゆる快癒の喜びが彼 [=主] から
 彼に助けを求めるために、そこへ急ごうとした
 すべての人々に常に十分与えられた。

ここでは本来単数であるはずの *sô wer sô* が、複数の名詞 *allên liutin* に対応し、数の不一致を示しているが、関係文は *allên liutin* を限定的に修飾し、これを先行詞と見なすことができる。こういった例は、不定関係代名詞が、一部には定関係代名詞の用法へと転用されたことを示すものである。

また『イーヴァイン』には逆に、定関係代名詞が不定関係代名詞の意味で用いられた例も数例²⁴見られる。

- (26) daz im dâ überiges schein,
daz âz der lewe unz an diu bein. (3909f.)
 そこで彼が残したものは何であれ、
 獅子が骨までむさぼり食った。

23 長縄寛「オトフリトの『総合福音書』における不定関係代名詞」関西大学大学院『千里山文学論集』第68号、2002年 135ページ以下参照。

24 Vgl. G. F. Benecke: Wörterbuch zu Hartmanns Iwein. 3. Ausgabe, besorgt von Conrad Borchling. Leipzig, 1901, S. 41. 定関係代名詞 *der* が *swer* の意味で用いられる例として、例(26)のほかに 3132.7748. の2例が挙げられている。

こういった不定関係代名詞と定関係代名詞との接点について、エバート (Robert Peter Ebert) は、『オトフリット』を例にとり、次の例を挙げで説明している²⁵。

(27) Sô wer sô in mih giloubit ... (III. 24, 29)

(28) Inti alle ... thie giloubent in mih (III. 24, 31)

私を信じる者は皆…

(27) では不定関係代名詞 *sô wer sô* が用いられ、(28) では定関係代名詞 *thie* が用いられているが、内容的には「私を信じる者は皆」という同じ意味である。従って両者の間に、「既に古高ドイツ語期に、或る意味上の接点があったに違いない」と彼は述べている。このことからすると、例 (25) のように、数の不一致を無視してまでも、敢えて *sô wer sô* を用いたのは、既にこの時代、不定関係代名詞構文が、(28) のような定関係代名詞を用いた構文と並行した手段として用いられていたためではないかと考えられる。もちろん『オトフリット』のような脚韻の作品では、まず、韻を踏むことが第一であり、例えば (25) では、*ginuag* の押韻相手として *giwuag* という単数形が選ばれ、このため *sô wer sô* を使わざるをえなかったと言うこともできる。従って、当時のドイツ語では、押韻が構文に与える影響が非常に大きかったということも、当然考慮に入れなくてはならないであろう。

2. 副詞節の機能の関係文

冒頭で述べたように、中高ドイツ語には、*swer*, *swaz* によって導入された副文全体が、統語上、主文に対する副詞節として機能する例が見られる。つまり、関係文が、主文に対して一つの補足語 (*Ergänzung*) として機能するのではなく、添加語 (*Angabe*) として機能するものである。このような *swer* は大抵、条件文や認容文を導入し、*„wenn man“* の意味で用いられ、*swaz* は認容文を導入して *„was auch immer“* 「何であ

25 Vgl. Ebert, Robert-Peter: Historische Syntax des Deutschen. Stuttgart, 1978, S. 24.

れ」、さらには場所、時、様態の副文を導入し、“*wo auch immer*”、“*wie auch immer*”、などの意味で用いられる。

2.1 条件文、認容文を導入する *swer*、*swaz*

- (29) *mich dunkt, ichn überwinde niht*
daz laster unt tie schande,
swer iuch ûz mînem lande
alsô wunden siht varn. (5526ff.)
 もしあなたがこれほどの傷を負って
 私の国から出て行くのを人が見れば、
 私は恥辱と不名誉に
 打ち勝つことができないように思われます。
- (30) *und swaz ouch mir dâ von geschiht,*
sône lougen ich des niht
ezn vuocete mîn rât und mîn bete
daz sîz ie umb in getete; (4127ff.)
 そのために私がどんな目に遭おうとも
 私はそのことを否定しません。
 たしかに、私の助言と私の頼みで、
 ご主人はあの方と結婚することになったのです。

(29) は条件文を導入する *swer*、(30) は認容文を導入する *swaz* の例である。こういった例は *swer* に 13 例²⁶、*swaz* に 4 例²⁷ 見られ、『イーヴァイン』以外の作品でも比較的多くの例が見られる。これらのケースでは、副文全体が主文に対して必要不可欠な要素とはならず、副詞的な成分として機能する一方で、副文中の *swer*、*swaz* の機能は、主語や目的語といった名詞的成分である。これに対して次に挙げる例では、*swaz* は関係文中でも副詞的成分として機能している。

26 例 (4)、(29) の他、196. 202. 1502. 2396. 2489. 2839. 4142. 5197. 4192. 5503. 6707.

27 例 (30) のほかに、5002. 7008. 7574.

2.2 副詞的用法の swaz

- (31) sus entworhter in dô
wand er in gar zevuorte,
swaz er sîn beruorte. (5382ff.)
こうしてその時、彼〔=獅子〕は彼〔=内膳頭〕を打ち倒した。
というのも獅子が触れたところはどこでも
彼をずたずたに引き裂いたからである。
- (32) ez gât an alle mîn êre
swaz ich nû hie gebîte: (4832f.)
私が今ここでぐずぐず待っていれば、
それだけ私の全ての名誉に関わることになる。
- (33) ouch enwil ich niht engelten
swaz ir mich muget schelten. (213f.)
あなたが私をどれほど非難しても、
私は仕返しをするつもりはありません。

例 (31) は „wo auch immer“ という場所の意味、(32) は „jeden Augenblick, den.“ という時の意味、(33) は „wie auch immer“ という様態の意味で用いられた swaz である。こういった副詞的用法の swaz は『イーヴァイン』に 7 例²⁸ 見られる。

3. おわりに

最後に、これまで見てきた『イーヴァイン』における不定関係代名詞の用法を、関係文の前置、後置の別に、一覧表にして示そう。表 1 が関係文の前置、表 2 が関係文の後置に関するものである。表 3 は第二章で扱った副詞節の機能のものである。表 1、2 の名詞節の機能の関係文では、左から順に、主文中に代名詞が置かれないケース、人称代名詞が置かれるケース、指示代名詞が置かれるケースに分類し、さらにそれぞれ

28 例 (5) と (31) - (33) のほかに、2876. 5315. 3247.

のケースについて、主文と関係文が要求する格の組み合わせを挙げてある。表1の関係文前置の場合には、例えば主一与；2は、関係文の要求格が1格、主文の要求格が3格で用例数が1例という意味である。後置の場合は逆に、主文の要求格、関係文の要求格の順で示してある。

まず、表1の関係文前置の場合であるが、既に述べたとおり『イーヴァイン』では、主文中に置かれる代名詞は、今日のドイツ語と同じように指示代名詞 *der*、*daz* の方が多いとは言え、古高ドイツ語とおなじように依然として人称代名詞も用いられている。これは今日ではもはや見られない用法である。また格に関して言えば、主文と関係文の要求格が同じ、あるいは中性 *was* の1格・4格の組み合わせである場合、主文中の代名詞を省略できるという今日の現象に対応する例は見られず、*swer* ではともに1格が要求される例が31例中15例、*swaz* ではともに同じ格のもの（2格－2格は除く）と、1格と4格の組み合わせのものを加えると、16例中7例も見られるにもかかわらず、すべて主文中に代名詞が置かれている。また、関係代名詞の格が関係文中でなく、主文中で必要とされる格に合わせられる、いわゆる「牽引」の例も若干ではあるが見られる。

次に関係文の後置の場合、通常 *Nhd.* では主文中に代名詞を置かないとされるが、『イーヴァイン』では置かれる例も見られ、前置の場合と同様、指示代名詞だけでなく人称代名詞も用いられる。また「牽引」の例も同様に見られる。関係文後置に特徴的なのは、*swer* に比べて *swaz* の方が数多く見られ、しかもその多くは主文中に代名詞の置かれないケースであるということである。つまり、今日 *was* は、不定関係代名詞としての用法と、*das*、*alles*、*etwas* など、及び中性名詞化した形容詞を先行詞に取る定関係代名詞的な用法とに区別されるが、『イーヴァイン』では、定関係代名詞的な *swaz* の用法は少ないと言えるであろう。しかし既に『オトフリット』には、名詞を先行詞に取る例も見られたが、こういった例は古高ドイツ語で、既にこの用法が確立していたということの意味するものではない。アドモーニによれば、古高ドイツ語では従属文の発達段階は「すべての現象が並行して進み」、「かなり多様な形式で現われる」と述べている²⁹。従ってこのような構文も、多様な形式の一つとし

29 Admoni, Wladimir: Historische Syntax des Deutschen. Tübingen, 1990, S. 63.

表 1：関係文の前置

swer			swaz			
ohne Pron.	er	der	ohne Pron.	ez	daz	dâ
	主一主; 5 主一与; 1 主一属; 1 主一対; 1	主一主; 10 主一対; 5 主一与; 5 主一属; 2 与一主; 1 与一属; 1 対一主; 1 (<i>diu</i> , n.pl.)		対一主; 2	対一属; 4 対一対; 2 属一属; 2 対一主; 1 主一主; 1 主一対; 1 (牽引) 属(対)一属; 1	対一与; 1 (<i>dâ. .an</i>) 主一与; 1 (<i>dâ. .mite</i>)
0	8	25	0	2	12	2
33			16			

表 2：関係文の後置

swer			swaz		
ohne Pron.	er	der	ohne Pron.	ez	daz
与一与; 2 対一対; 1	主一主; 1		対一対; 9 対一属; 6 対一主; 3 主一対; 2 (牽引) 対一対(属); 1	主一対; 2 対一主; 1 主一属; 1 属一対; 1	(牽引) 属一属(対); 1
3	1	0	21	5	1
4			27		

表 3：副詞節の機能の関係文

前置		後置	
swer	swaz	swer	swaz
8	4	5	7
12		12	

て現われたものであるとすることができるかもしれない。またそこには、多様な構文が生み出される一要因として、『オトフリト』がドイツ文学史上初めての大規模な脚韻詩であるため、押韻への努力の結果、押韻が構文に大きな影響を与えたであろうことも忘れてはなるまい。このような

古高ドイツ語の混沌とした状況に対して、中高ドイツ語の『イーヴァイン』では、不定関係代名詞の用法は文法化の途上にあると言える。つまり、*swer*や*swaz*が後置された時には、代名詞を置かないという意識が次第に浸透しつつあるものの、定関係代名詞的な用法が発達するまでには至っていない。ただ、例を挙げて示したように、定関係代名詞が不定関係代名詞の意味で用いられる例も見られ、既にこの時代には両者の間に何らかの接点があったことも確かである。

主要参考文献および引用文献

- Admoni, Wladimir: Historische Syntax des Deutschen. Tübingen, 1990.
- Behaghel, Otto: Deutsche Syntax. Bd.1-4. Heidelberg, 1923-1932.
- Benecke, Georg F.: Wörterbuch zu Hartmanns Iwein. 3. Ausgabe, besorgt von Conrad Borchling. Leipzig, 1901.
- Benecke, G. F./Müller, W./Zarncke, F.: Mittelhochdeutsches Wörterbuch I-III. Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-61. Hildesheim, 1963.
- Dal, Ingerid: Kurze deutsche Syntax. 3., Verbesserte Auflage. Tübingen, 1966.
- Ebert, Robert-Peter: Historische Syntax des Deutschen. Stuttgart, 1978.
- Erdmann, Oskar (Hrsg.): Otfriids Evangelienbuch. Halle a. S., 1882.
- Erdmann, Oskar: Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfriids. 1. Teil. Halle, 1874.
- Hartmann von Aue: Iwein. Text der siebenten Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann und L. Wolff. Dritte, durchgesehene und ergänzte Auflage. Berlin/New York, 1981.
- Kelle, Johann: Glossar der Sprache Otfriids. Neudruck der Ausgabe 1881. Aalen, 1963.
- Kelle, Johann: Christi Leben und Lehre. Besungen von Otfrid, aus dem Althochdeutschen übersetzt. Prag, 1870.
- Paul, Hermann: Deutsche Grammatik. Bd. 4. Unveränderter Nachdruck der 1. Auflage von 1920. Tübingen, 1962.
- Paul, Hermann: Mittelhochdeutsche Grammatik. 22. Auflage von Hugo Moser, Ingeborg Schröbler und Siefried Grosse. Tübingen, 1982.
- Piper, Paul: Otfriids Evangelienbuch. 2. Theil. Glossar und Abriß der Grammatik. Freiburg, 1887.
- 新保雅浩訳著『オトフリートの福音書：古高ドイツ語』、大学書林、1993年。

赤井慧爾・斎藤芙美子・武市修・尾野照治訳著『ハルトマン・フォン・アウエーヴァイン』、大学書林、1988年。

平尾浩三・中島悠爾・相良守峯・リンケ珠子訳著『ハルトマン・フォン・アウエーハルトマン作品集』、郁文堂、1982年。

Zu den unbestimmten Relativpronomen im Iwein Hartmanns von Aue

Kan NAGANAWA

Im Deutschen gibt es zwei Typen der Relativpronomen. Der eine hat sich aus dem Demonstrativ *der, die, das* und der andere aus dem Interrogativ *wer, was* entwickelt. Was den letzteren betrifft, so ist der Ausgangspunkt für das Eindringen des Interrogativs in relative Funktion die Verbindung ahd. *sô (h)wer sô, sô (h)waz sô*. Diese Form ist schon im Ahd. durch den Wegfall des zweiten *sô* zu *sô wer, sô waz* gekürzt und im Mhd. zu einem Wort *swer, swaz* verschmolzen. Das unbestimmte Relativpronomen fungierte ursprünglich als selbständiges nominales Glied des übergeordneten Satzes. Aber schon im Ahd. sind daneben die Konstruktionen mit dem Demonstrativpronomen *der* oder dem Personalpronomen *er* zu finden, welches im Hauptsatz auf den Relativsatz hinweist. Im Iwein erscheinen nicht nur diese drei Typen, sondern auch noch ein anderer, der nicht als nominales Satzglied, sondern als adverbiales für den Hauptsatz fungiert, was man in der Gegenwartssprache nicht findet.

- (1) *,irn habet niender selhen helt
ern lâze iuch nemen swen ir welt
ê er iu den brunnen bewar.* (2163ff.)
- (2) *wand ers ofte engiltet
swer borg niene giltit.* (7155f.)

- (3) *,swer sich an troume kêret,
der ist wol gunêret.‘* (3547f.)
(4) *Swer gerne gîltet, daz ist quot.* (7147)

Im Iwein finden sich insgesamt 78 nominale Relativsätze und 26 adverbiale Relativsätze. In dieser Arbeit werden die vorangestellten und die nachgestellten Relativsätze unterschieden, und in Bezug auf die nominalen Relativsätze werden sie weiter in drei Subklassen unterteilt: a) ohne Pronomen im Hauptsatz, b) mit Personalpronomen und c) mit Demonstrativpronomen.

Wenn der Relativsatz dem Hauptsatz vorangestellt wird, kommt in der Mehrzahl der Fälle das Demonstrativum vor: bei *swer* erscheinen die Belege ohne Pronomen niemals, mit Personalpronomen *er* 7mal und mit Demonstrativpronomen *der* 24mal; bei *swaz* findet sich gleichfalls kein Beleg ohne Pronomen, die Belege mit *ez* zweimal und die mit *daz* 12mal. Im Gegensatz zur Gegenwartssprache erscheinen die Belege mit Personalpronomen *er* oder *ez*. Darüber hinaus zeigt das folgende Beispiel, dass das singularische Relativpronomen vom pluralischen Demonstrativum im Hauptsatz wieder aufgenommen wird.

- (5) *an swen got hât geleit
triuwe und andern guoten sin,
volle tugent, als an in,
und den eins guoten wîbes wert,
diu niuwan sînes willen gert,
suln diu mit liebe lange leben,
den hât er vreuden vil gegeben.* (2426ff.)

Wenn der Relativ- und der Hauptsatz den gleichen Kasus oder bei neutralem *swaz* die gleiche Wortform (im Nominativ und Akkusativ) verlangen, kann man im Nhd. das Pronomen im Hauptsatz weglassen. Aber im Iwein wird in all den Belegen des vorangestellten Relativsatzes

irgendein Pronomen in den Hauptsatz eingefügt.

Wenn der Relativsatz dem Hauptsatz nachgestellt wird, nehmen dagegen die Fälle ohne Pronomen zu: bei *swer* finden sich die Belege ohne Pronomen dreimal, mit *er* nur einmal und mit *der* niemals; bei *swaz* erscheinen die Belege ohne Pronomen 21mal, mit *ez* 5mal und mit *daz* nur einmal. Beim nachgestellten Relativsatz ist die gleiche Tendenz wie im Nhd. schon erkennbar, das heisst: dass kein hinweisendes Pronomen im vorangestellten Hauptsatz eingesetzt wird.

Sonst gibt es im Iwein die Belege, die die Inkongruenz in Kasus und Zahl zeigen, was in der Gegenwartssprache prinzipiell unmöglich ist, wie zum Beispiel:

- (6) *sô mac sî mit minnen*
vil wol von mir gewinnen
swaz sî des minen ruochet, (5731ff.)

Im Mhd. ist die Tendenz zur Grammatikalisierung des Relativpronomens einerseits einigermaßen erkennbar, aber andererseits stehen auch verschiedene syntaktisch unklare Phänomene nebeneinander.